

元気な地域のかたち創造ワークショップ 情報交換会

日時：2009年11月12日 17:30~19:00

場所：いわてNPO-NETサポート 事務所

参加者：

弘前大学教育学部副部長 北原 啓司氏
いわて地域づくり支援センター 若菜千穂氏
北上市政策企画課 千葉 謙太氏
北上市地域づくり課 久保田 達夫氏

弘前大学教育学部大学院生 鹿内 綾子氏、
北上市政策企画課 高橋 剛氏、
北上市地域づくり課 佐々木 範久氏、
いわてNPO-NETサポート 高橋 敏彦 菊池広人

1. 開会

いわてNPO-NETサポート 菊池 広人

今日の情報交換会は、現状を把握して、さまざまなアドバイザーの皆さんに、北上市の集約都市の実現のために、どのようなアドバイスをいただい
ただくか、そのための情報をいただくのが一番の目的です。宜しくお願ひします。

2. あいさつ

いわてNPO-NETサポート 高橋 敏彦氏

テレビ等で伝えられるとおり、昨日から事業仕分けが始まりました。アイデアが問われる事業の補助金・助成金もけっこう切られているので、今後どうなるかという思いでいます。元気な地域のかたち創造ワークショップは、国交省では来年度もという思いでいるようですが、成果が問われるのであろうと思います。ぜひいい成果を出したいと思ひますので、宜しくお願ひします。

3. 情報提供

テーマ：あじさい型集約都市の実現に向けた取り組みの現在の状況について

①今年度の元気な地域のかたち創造ワークショップの進捗について

いわてNPO-NETサポート 菊池 広人

・元気な地域のかたち創造ワークショップの今年度の流れ

あじさい型集約都市は地域コミュニティが魅力ある地域づくりを実践することと、既存の都市機能、都市ストックの有効活用をつなげることにより、北上型持続可能な社会をつくっていかうとい

うものがあじさい型集約都市の一番の根幹の部分と考へております。地域を支える公共交通、地域と都市機能をつなぐ公共交通というものを一つのメインとしながら、さまざまなコンテンツの情報収集をし、そのなかで北上型のあじさい型集約都市の実現の方法のためのノウハウを蓄積していこうというのが今回の目的です。

大きくは、有識者会議、フォーラムと地域コミュニティ維持のための交通実験、中心市街地活用のための交通実験を今、実施しているところです。

・乗り合いタクシーの社会実験

乗り合いタクシーの現状を知るということを今、若菜さんと一緒にやらせていただひています。

北上の乗り合いタクシーは北上の西部、和賀地区において、定時定路線で乗り合いタクシーを、行政からお金が入らずに1回500円、前日予約により運行しています。

現状としまして、1日当たりの乗車率が横川目0.6人、岩崎2.1人、藤根2.7人となり、1便あたりになると、1人を切っているという現状です。

乗合タクシーは予約がないと運行しないので、運行した場合に何人乗るかということです。1回走ったときに、×500円がタクシー事業者さんのあがりになります。

ヒアリングから見ると、利用している方は便利だと感じているのですが、これまで無料だった患者輸送バスに比べると、時間帯の部分での利用勝手が悪いということと、予約に対するバリアが非常に高いのかなと考へております。

特に、時間帯が合わないということですが、コ

ースと時間を見てみると、病院2つ行くと帰ってこれないということや仙人コースの火曜日は帰ってこれないという現状もあります。また、「病院が長引いたときにキャンセルしたけれど、来てしまってお金を取られた」というような噂が岩崎で広まっていて、そういったところもバリアになっているのかなあというのが現状としてあります。

今の既存の乗り合いタクシーは、利用している方は便利だと感じている方もいらっしゃるのですが、そのなかでバリアを取り除こうということを今、やろうとしています。

バリアの一つ、運行時間帯が、例えば火曜日だと、1便で岩崎に行った車がそのまま、藤根コースの1便に入り、そのまま仙人コースの1便に抜けたあと、岩崎コースの2便に行き、藤根コースの2便に入るというように、全て1台で回すというようなかたちで、どちらかといえば、タクシー会社側の都合によって便数を決めているというような現状があります。和賀観光タクシーさんが全部埋まっているということではないと思うので、時間変更の部分や、また、どこを回るのかなかなか把握できないような状況なので、自治公民館単位で「ここに行きたかったら、ここに電話をして、何分のバスに乗って、何分のバスに乗り継ぎをすると、まちなかに行ける」というような案内の改善がいいのではないかと思います、今、準備をしているところです。

・まちなか交通点検

中心市街地の交通なのですが、10月5日にまちなか点検をしました。皆さん、ご存じのように駅に降りたときにどこに行くかがわかりにくいという状況になっていました。バス乗り場にはまだ「北上病院」が残っていたり、バス停も非常に見にくいというところがありました。中心市街地の部分に関しては、さくら野に行こうという時に、バス停がいっぱいあって、どうなっているかわからない、10分に1本はさくら野から駅に行くバスがあるのに、その利便性が全然活かされていないという状況です。

バスは走っているので、表記を改善していけばいいのではないかと、ところをバスの社会実験とさせていただきたいと思います。

「すぎか市民バス」の資料についてですが、これは吉田さんによるもので、実際、須坂市で使っ

ている表記です。これを参考に、もう少し大きくわかりやすく、情報量を落としかたちのものを各バス停に置くということと、県のバス協会さんと一緒に、駅前の案内看板を修正できる予算があるということなので、その辺りも既存を生かした形での案内方法の修正をしながら、利用促進を図っていきたいと思っています。社会実験というよりは改善活路のほうを乗り合いタクシーとバスのほうでさせていただきたいと思っています。

・口内町有償ボランティア輸送事業

口内の過疎地有償運送は、町内型運行と町外型運行の両方をやるということで今、動いています。町内運行に関しては、口内町内だったら誰でも乗れてバス停まで行けるという運行と、バスに乗れない介護保険適用者に関しては、まちなかまで送っていくという2つの並行したサービスをやりたいと思っています。

金額設定は、町内100円、町外は片道1000円という設定をし、具体的にNPOくちないがタクシー業者と一緒に話し合いを進めているところです。なかなかハードルが厳しく、ここから先が進みにくいというのが今の現状です。

過疎地有償運送の実現のためには、市長が主催する運営協議会で承認されることが必要で、運営協議会の構成メンバーには、バス会社、タクシー事業者が入ってきますので、そこでの合意が得られない限り、スタートできないという状況です。

それから、10月14日、中心市街地活性化のための勉強会を開催させていただきました。ここから先、このようなかたちで様々なコンテンツを持っている方たちに来ていただき、中心市街地活性化、地域での生活機能維持に向けて取り組みの勉強会をさせていただきたいと思います。まずは、公共交通の改善とノウハウの蓄積を今、進めているところです。

②公共交通ビジョンについて

北上市 政策企画課 千葉 謙太氏

今年から、公共交通ビジョンということで、北上市の公共交通がどうあるべきか作成のための活動を行っています。乗降調査を若菜さんのほうでやっていただき、まちなか交通点検も市で行いました。のりたくんの社会実験も検討中です。口内

の過疎地有償運送は、現在やりとりを続け、実現に向け、動いているところです。

いわて地域づくり支援センター 若菜 千穂氏

・ビジョンスケルトン案

10月30日に、吉田先生にアドバイザーとして入っていただいて、ビジョンの在り方や何のためにビジョンをつくる必要があるのかをざっくりとばらんに検討しました。大体の方向性が見えてきたかなという段階ですが、庁内でのオーソライズはまだですし、こちらからの提案ということで聞いていただければと思います。

1) 現状と課題

現在、路線バスが走っていないところはコミバスや乗り合いタクシーや過疎地有償運送など様々なものが突発的に発生しています。

それから、今、路線バスが走っているところも、事業者が赤字にもかかわらず、やむを得ず走っているという状態で、倒れるところは一気に倒れるというようなことを、先生からも指摘をいただいています。市として、現段階で事業者が撤退した後、どうするのかということを経営として盛り込む必要があるということです。

ですから、今回のビジョンは住民や利用者がこう考えているからこうしようというよりは、市として、ここについては責任を持って維持していく、そして、どのように維持していくかの考え方を示すというようなことをビジョンとしてはどうかということ、話し合いを続けている所です。

・公共交通の姿（資料1-3）

現在の人口分布を示したものです。まちなかに向かって多いのですが、湘南高校周辺や藤根周辺も多く分布しています。これを踏まえて、今、ざっくりとばらんにブレインストーミングをしている段階です。

2) 北上市における『公共交通』とは（あるべき姿）

路線、区域の仕分けをこのビジョンで示したいと思っています。

一つは、事業者で維持してもらおう線、これは、市町村をまたぐ線は北上市で維持したいと言って維持できるものではないですし、様々な市町村

と話し合いながら調整していくというのも大変なので、事業者さんである程度調整をしてもらって維持していく路線です。

二つ目は、市内のいわゆる不採算路線については市がイニシアチブを取るということです。私たちはこのように走らせたいから、事業者さん協力してくれというように、企画段階から、口を出し、金も出していくような路線を決めていく必要があります。これが重要になっていくという提言をしたいと思います。

三つ目は、住民が主体的に参加をすることを条件で支援をしましょうというような切り分けもしたいと思います。

この仕分けがビジョンの目玉になるところです。

・北上市のあじさい型公共交通のかたち（提案）

☆で示される北上市のまちなかを中心として、青い線が事業者さんに走ってもらう線、白く太くしてある部分が幹線区間という言い方をしていますが、事業者さんに走ってもらいながら、この中に北上市として機能を集約させていく、住民に住んでもらえるくらいに路線バスの頻度を充実させていき、ある程度誘導していくのはどうかというかたちで、公共交通の役割を果たしていく区間としています。小さい☆が江釣子ショッピングセンターです。ここから西側についてはある程度、☆までは結ぶというように、全てが大きい☆ではなく、中継地点をつくってはどうかということです。例えばということで、江釣子に1つ置いています。吉田先生のお話では、全部のバス路線を江釣子ショッピングセンターに結んでしまっただけということ、そういう考え方もアリかなと、そういった議論をしているところです。

青い線以外の所は、住民が主体的に関与することを条件に市がサポートする体制を整えた方がいいのではないかと考えています。

赤い丸が付いている所が小・中学校なのですが、そこから先に住宅があるようなところはある程度、スクールバスも走っているので、スクールバスと一緒に住民の人たちが乗るような公共交通も考えられます。末端の在り方は、幹線の維持と支線エリアの維持では方向が違い、支線エリアはスクールバスの混乗や乗り合いタクシー、過疎地有償と

いろいろやり方があるということもビジョンの中で紹介していこうと思っています。

・質疑応答

高橋 敏彦氏

資料の口で囲まれた事柄はどこのことを指しているのですか。

若菜 千穂氏

口内…スクール需要を取り込んだバス路線維持、過疎地有償運送

黒岩・更木・稲瀬…スクール需要を取り込んだバス路線維持

藤根周辺…デマンド型乗合タクシー、スクール需要を取り込んだバス路線維持

岩崎…スクール需要を取り込んだバス路線維持というイメージです。

高橋 剛氏

「持続可能」と考えた場合、公共施設において、行政で規制するのは用途や公共施設の配置、これは集約という方向性になると思うのですが、学校の統廃合も出てきます。そういったことを見定めていかなければならない局面であります。そういったなかで、スクールバスの取り組みが重要になってきて、スクールバスでの通学範囲を広げながら、公共施設の配置の効率化も考えていかなければならないということですので、公共交通ビジョンではスクールバスの視点も考えていければと思います。

いわて NPO-NET サポート 菊池 広人

補足ですが、北上市東部の口内地区が今、過疎地有償運送をしようとしている地区で、西部の岩崎、藤根、横川目が乗合タクシーをやっている地区です。乗り合いタクシーに関しては、幹線沿いの利用率が少なく、幹線から離れた人が利用しているという現状です。

③国土利用計画について

北上市 政策企画課 高橋 剛 氏

今、総合計画の基本構想を進めており、そのなかで土地利用構想が位置づけられながら、国土利用計画をつくっているところです。

先ほどの若菜さんの資料で、大きい☆のある南北の線と東西の線がありますが、今回の総合計画

基本構想の中でも、都市地域（都市的土地利用地域）と位置づけ、周辺地域との機能分担、連携交流という視点を持ち、土地利用を進めていきたいと考えております。

そういったなかで、コンパクトシティの話もあり、いかに人口減少、少子高齢化という社会の流れの中でまちづくりを進めていくか、持続的に公共サービス、生活サービスが提供できる仕組み、まちのかたちを考えていかなければならないと考え、取り組んでいます。

その一つとして、市としても若菜さんから説明のあったように、公共交通の考え方と向き合っていくところなんです。先ほど、菊池広人さんの説明でもありましたが、いかに北上市が取り組んでこなかったかがわかると思います。今までは、コミュニティバスや路線がなくなってきたところに割り当ててやっていた、対処療法的な取り組みでありました。しかし、将来的に継続が期待できない状況がありますので、そういったサービスをどうすれば維持していけるか、周辺部でも人口減少が著しい地域もありますので、住民の生活、例えば、買い物や病院に行ける、通学できるといった生活機能を確保できる取り組みとして公共交通を考えながら、トータルの土地利用、国土利用計画を定め、都市マスやまちの用途地域の見直しも含めて考えていきたいと考えております。

例えば、地域づくりの視点でも北原先生にご協力いただいて、景観という視点の地域づくりの一つとして位置付けながら、いかに北上市というまちを継続してかたちづくっていくかを一生懸命悩んで取り組んでいるところです。

・総合計画基本構想の概要

「将来の人口」で、今回、いろいろなパターンを推定してみたのですが、北上市も今後 10 年間、総合計画の期間内で人口減少が始まるということで、今までは工業振興、働き場所の確保等の施策を 30 年来ずっと続けてきた北上市はずっと人口増であったのですが、多分にもれず、本市においても減少していくという状況があります。

そのなかでのまちづくり、それからツールとしての公共交通ビジョンをどう活用、展開していくか真剣に向き合おうとしているところです。

土地利用構想は、公共交通の幹線の基軸として国道 4 号、国道 107 号を基軸とし、その部分を都

市的土地利用を進めていく地域、中心市街地を含めて市街化としての位置づけ、周辺を自然と共生していく土地利用、農村地域と整理し、そのなかでの効率的な土地利用を考えていきたいと思っています。

新たに施設をつくるとか、ハード整備していくという場面ではなく、今ある都市機能を有効活用しながら、機能分担、連携交流という視点を地域計画に入れ、トータルとして考えていこうと取り組んでいます。

④都市計画マスタープランについて

北上市 都市計画課 高橋 英樹氏

まちづくり三法の改正を受け、18年度から集約型都市ということで動いてきました。その際に、まちづくりの理念として「農村と都市が調和した集約型都市の実現」と掲げ、検討してきました。18.19年で検討をし、20年度で「あじさい型集約都市」ということでやっていただきました。

18.19年でまとめた際に、まちなか区域の設定、周辺の用途設定や土地利用の認可、それ以外の所については、大規模店が張り付かないように、集約に向けた北上型集約型都市ということで、設定しています。

20年度21年度で人口減が始まり、これに向けて実現しなければならないということで、皆さんがまとめられたものを、再集計して私たちのほうでまとめないといけないと考えております。

今後のスケジュールに関しては、平成22年度23年度の2カ年で作り上げる予定です。

・質疑応答

菊池 広人

張り方としては、今より細かくする感じなのですか。

高橋 英樹氏

前回の18.19年の際は、農政サイドも入って農業系の方でも縛りかけるといこともありましたが、うまくいか不安な部分もあるので、私たちでそこに代わるものをやっいていこうと、個人的には思っています。

⑤実現に向けた地域の取り組みについて

北上市 地域づくり課 久保田 達夫氏

あじさい型集約都市というものを意識して地域計画はつくられていないので、果たしてどこまで、今のものがつながってくるかよくわからないのですが、分権社会が進む中で、市の中でも、それぞれの地域をよくわかっている方々が、地域がどうあるべきか、何をすべきかを考え、計画してもらおうということで、地域計画をつくっていただいているところです。

どちらかというと、全体の市の中での位置づけを意識されているというよりは、細かく自分の地域の中だけでどうあるべきかという視点が強いので、あじさい型集約都市の中味が計画の中に盛り込まれているなど感じるものは正直、あまりないです。

公共交通に関して言えば、更木地区、口内地区などいくつかの地区からコミバスの増便を望む意見があったり、地域内交通の充実を出してきているところはありますし、地域機能の部分で言うと、危機感があるところ、幼稚園、小学校がどこかと統合してなくなってしまいそうだという地域、具体的には更木、稲瀬、笠松といった地域では、危機感があるので、盛り込まれてきていますが、それ以外では生活機能が維持されるためにどうしたいのかという視点のものはあまり来ていません。

特に大きく課題として挙がってくるのは、少子高齢化にどうやって対応していくか、人が少なくなってきて集落として維持できなくなるのではないかという危機感を持っている地区が、北上川東側を中心に増えてきています。あじさいの前に、集落が維持できるかどうか、機能集約と集落維持、どちらが先かということだと思います。その辺りが、あじさい型集約都市を展開するうえで、集落が維持できるかどうか、そのバランスが難しくなると思っています。

地域計画の進捗状況としては、昨年8月中旬辺りから動き出し、若菜さんの協力をいただき、7月までに各地区から素案ということで計画を出していただきました。これからは市と地域とが情報交換しながら計画の精査をしていく段階で、5月までにはある程度、今の素案を見直したものを地域から出していただき、そのなかで予算状況を見ながら、市が対応できるもの、できないものを判断して地域にお返ししていくという流れで地域計画をつ

くっていかうと考えています。

4. 意見交換

高橋 敏彦氏

10年前の地域計画と今の地域計画の変化を見て、分析したいと思います。それから、集落の維持があじさい型都市のねらいなので、それぞれで生き残るといふかたちなので、それぞれで生き残るためにはどうあればいいかということが話し合われているようなので、中味を見たいと思います。全体の計画とどうリンクしてくるかも総合計画作成の中で出てくると思います。

高橋 剛氏

地域が自分たちの地域について取り組まれているのはいいことだと思います。各周辺部にも小さな拠点づくりのような形で生活機能を充実していく部分を総合計画の視点の一つとして盛り込めればと思っています。拠点づくりの一つとして、例えば、産直や定住交流の情報発信の場、そういったものが位置付けられれば、そこを一つの核として、そこに付随する複合的サービスを集約していくというような場所をかたちづくっていければ、そこが持続的につながっていくのではないかと思います。

高橋 敏彦氏

聞いた限りではそういった案がけっこう出てきていますね。10年前とはそういった視点が違ってきていると感じます。

高橋 剛氏

一つのきっかけとして、地域づくりをし、少しずつ積み上げていって、かたちづくられればと思っています。事業数だけでいうと、広田先生や若菜さんにお手伝いいただいたおかげで、地域主体の事業が10だったものが20にというように、倍増しています。

若菜 千穂氏

事業の中で、生活機能を自分たちで補完、補強していこうというメニューはいくつあるのか見ていったらおもしろいと思います。

高橋 敏彦氏

そうですね。たぶん10年前はなかったと思いますし。

若菜 千穂氏

たぶん、北上市の外側が多くて、真ん中の方が少ないでしょうね。

高橋 剛氏

例えば、口内、黒岩地区のようなおもしろい事例があると、他地区も引っ張られるので、いいなと感じています。

菊池 (NETサポート)

具体的には、地域で雇用を生もうという計画をしているところがけっこう出てきています。例えば、更木では桑を活用した事業が今、実際に動いていますし、立花では展勝地があるので、指定管理も含めてのかたちで地域雇用をうまく生かして、集客維持につなげていきたいという意見もありました。公共交通では横川目、岩崎、稲瀬、口内、更木などが、コミバスを増やしてほしいという要望的なものから「自分たちで考えないとダメかな」という意見もありました。黒岩では、給食サービスを始めようという動きもあります。機能という部分がだいぶ出てきていると思います。

私たちの方でもそれらを抽出したものを発信していくことをこの事業でできたらいいのではないかと考えています。

高橋 剛氏

若菜さんにご提案いただいた「住民の主体的な参加をベースとして運行する路線」というのも、地域づくりからの視点も入ってくるのではないかと思います。

菊池 (NETサポート)

山形県河西町では、集落全加入NPOでの地域づくりを行っています。自治会としてNPOをつくっており、2700万位の自治会費や雑収入全部の会計を1本化してやっています。そちらの方も勉強会でお呼びしたいと思っていました。

若菜 千穂氏

そのまちは山のほうですか。

高橋 敏彦氏

人口3000人位いるので、完全に山でもありません。見た感じはある程度、生活機能もありますし、それを自分達で生かして、商売も始めています。

菊池 (NETサポート)

コンビニが出店したいといったら、「これも生活機能だから」ということでスリースペースをつくってくれと提案してつくってもらい、コンビニの中で囲碁将棋をやったりということもしています。

高橋 剛氏

黒岩でもそういった動きがありますよね。

菊池（NETサポート）

はい。口内でも、10月から月10万で農協跡地を借りて、そこでも同じようなかたちでやっているという動きがあります。

それから、地域計画で考えなければと思ったのが、稲瀬の照岡小学校の問題で、地域としては「統廃合はいやだ」という話になっているのですが、小学生を持つ親のみにアンケートを抽出すると、「少人数教育よりは立花小学校と合併して、ある程度人数がある中で教育をさせたい」という意見に賛成が多かったということなので、地域計画をたてるときや、機能維持の中でしっかりとどういった受益者がどういった判断をするのかを見ていかないといけないなと実感しました。

高橋 剛氏

和賀町が先に学校の統廃合が進んでいるので、実際に、やってみてどうだったのか、そこの親御さんたちの声を聞いてもいいかもしれないですね。

若菜 千穂氏

小学校がコミュニティ拠点と言われていますが、かといって16地区全部に小学校というのは、5年10年考えたらあり得ないので、小学校がなくなっても拠点としてあり得るようなものを示していかないとと思います。口内、黒岩さんはそういう例になるのかもしれないですね。

高橋 剛氏

はい。新たに施設をつくるというのは、今の北上市では考えられません。全部に教育、福祉、商店、そういう機能を配置するのではなく、機能を分担して、病院に行くのに公共交通を使ってもらって、そこの足を確保するとか生活サービスをいかに提供するかを考え、拠点に何を置いてどう構築していくかをこれから整理していかなければならないと思います。

菊池（NETサポート）

なくなってしまった後にやはり不便だと思うんですね。岩沢の駅前の商店がなくなって、「なくなって今になって不便を感じてきた」という声がこの1年間で多く聞かれるようになりました。

高橋 敏彦氏

なくなる前に守ろうというのがなかったんでしょうね。

菊池（NETサポート）

きらめく交付金で、買い物の補助などの地域支援サービスを和賀地区でやりたいという話も出ています。背に腹は代えられないという理論の方が強いのですが、必要だと地域の方も思ってきていただいているのかなと思います。

佐々木 範久氏

協働推進係として、こういった情報を知ることが一番重要だと思っています。今日のようなお話を聞かせていただいたのが、大きな収穫だと思います。地域で、地域の課題のなかで事業を考えながらやっていくというところまで、10年かけて成熟してきていますので、その課題を解決するとき、どういう風にするのか、「このようにすれば、一気に進みますよ」というようなお手伝いやサポート、あるいは溝を埋めるというようなところを中心に、これから協働推進のほうでやっていかなければと思っていますので、このような情報交換をさせていただきながら、つなぐ、バックアップするという視点で様々な情報を出していければいいなと思っています。

菊池（NETサポート）

農政と都市マスの連携もありますし、そういった場づくりをどんどんしていかないと何ともならなくなってきますよね。

佐々木 範久氏

はい。行政の中同士もそうですし、中と外の連携もあります。そういった橋渡しのイメージでいます。

若菜 千穂氏

そう考えると、公共交通は常に福祉と教育の壁に立ちはだかれて、狭い所に押し込まれています。その橋渡しもよろしくお願いします。

今週1週間、旧玉山村の公共交通の実態調査をしていました。あそこでは、無料の患者輸送バスを運行しています。利用率がかなり良くて、29人乗りのバスで20人以上超えて常に補助席が出ている感じです。無料で週1回走っています。100mも歩けないようなおばあちゃんたちも週1回このバスを楽しみにしていて、バス内では話が盛り上がり、待合所でもみんなでお昼を食べて帰ってくるという話でした。

基本的に、無料の患者輸送バスを有料にすべき

と思ったのですが、こういうのもアリだなという
か、とても効率のよい行政サービスだなという気
がして、地域が元気であり続けるためには必要な
んだと実感し、考え方を変えなきゃなと思いま
した。

公共交通は特に、利用者がお年寄りばかりにな
っているの、境がなくなっているの、その
壁は破らなければというのはずっと課題だっ
たのですが、これから本格化
していくんだろうなと思います。

千葉 謙太氏

玉山の全区域を走っているのですか。

若菜 千穂氏

路線バスがなくなったので、患者輸送バスでと
いうことで全面的にカバーしています。

12路線あり、それで満たせているので、公共交通
はいらない状況です。

北原 啓司氏

盛岡と合併して、そのサービスは維持できている
のですか。

若菜 千穂氏

合併からそんなに日が経っていないので、その
ままだと思います。合併時の約束で、10年間はそ
のまま、というのがあったみたいです。今の盛
岡市職員は、それで満たせているのなら、障るつ
もりはないと言っています。

高橋 剛氏

通院のためなのですか。

若菜 千穂氏

はい、まちなかの病院を循環しています。

北原 啓司氏

病院が一番、大きくて、でないとそこまで乗り
ませんものね。弘前の隣町で100円バスがあるの
ですが、病院のニーズはいいんだけど、通学も
入れようと思ったら、おじいちゃんおばあちゃん
が「1日1回孫と接する私の楽しみを奪わないで」
とあって、つまり送迎をしているのはおじいちゃん、
おばあちゃんなので、バスに乗らせないとい
うことがあります。学校が終わる時間、部活の終
わる時間に合わせて運行しても、全然かなわない
というのがネックとしてあります。

高橋 剛氏

北上でいうと、診療所、その機能自体がなくな
ってきたというのがあったので、いい悪いはあり
ますが、いいを残せないというのが悩みです。

5. 感想とアドバイス

北原 啓司氏

都市マスにしても総合計画にしても、どうい
うかたちで元気な地域のかたちという言葉を選びな
がらやっていくかが、今日出てきた全ての話につ
ながっていくと思います。

あじさい型という言葉があまり先行してしまう
のは、ということもあるけれど、元気な地域のか
たちの一つの形態としてあじさい型という言葉で
表現しようとしたというのは、北上のあじさい型
は、ひとつひとつが十分、意味を持っていて、そ
れらが繋がりが、ひとつひとつが主人公であ
るということです。主人公であるということをも
元気づけながら維持していこうという発想です。

あじさいという言葉があまりにもセンセーショ
ナルで市民の方にわかりづらいということであ
れば、一つのコミュニティ単位が主人公であり続け
る都市計画、というような話をしていけば理解し
やすい気がします。

そのような話が今日聞いたいろいろな話のメ
インだということが、僕はおもしろいと思ってい
ます。

というのは、僕たちが学生の頃は、流行は構造
主義で、その時、読まれた本はアーサー・ケス
トラーの「ホロン革命」です。ホロンとは部分が
全体を表す、つまり、一個の部分に全体があるか
ら、一個の部分がしっかり全体を持っていれば、
それが繋がった時には、おもしろい繋がりができ
る、つまり、それができない人たちはトーナメン
ト表のようにトップの下につきます。

部分が全体を持っていれば、誰かが主人公にな
れるから、ある時は口内が主人公のネットワーク、
ある時は黒岩というような、そういったネットワ
ーク像もあります。そういう意味ではあじさい型
もいい例だと思います。

しかし、「では中心市街地はどうするんだ」と
いう議論が出てきたとき、それは同じあじさいの
一つの単位であるという言い方をすることはで
きないだろう、中心市街地はあじさいの茎であり、
茎がなければ花が咲かないという言い方をしま
した。ですから、この話をずっと続けていくとき、
中心市街地活性化計画ビジョンと連動してい
かないと、茎が倒れてしまって花だけになってしま
うということになってしまう、ということの頭の

どこかに置いておかないといけないと思います。

それから、それぞれの花をしっかり伸ばしていこうと計画をし、都市計画サイド等からそれを支援していくというとき、横のつながりというか、どこかで俯瞰するような見方を都市計画ビジョンとして持っていなければいけないと思います。ひとつひとつの地域が元気になればなるほど、それらをコントロールではありませんが、繋ぐ論理のようなものをしっかり意識した部署がないといけません。

例えば、僻地の方の交通のニーズをどうやってデマンドでやるかということだけではなく、繋がりで考えていくということをししないと、個々の単体が2つ、3つ、4つの繋がりになり、4つの繋がりがまた1つの単位としておもしろくなっていくのです。そういうネットワーク論をしっかり考えていくことが、ひとつひとつをしっかりやっていくときには必要です。そういう論理をどうやって落とし込んでいくのだろうかという話があります。それは都市マスに言うべきなのかということです。

「元気な地域のかたち」というものを北上で提案するからこそ、交通というものを公共という意味合いでどうリンクさせていくかという話において、ひとつひとつのあじさいの花を繋げていくという見方を絶対忘れてはいけないと思います。それをやりながら、北上流の「元気な地域の持続可能なかたち」を考えていくのは非常に重要です。

それはモザイク模様の1単位ではなく、1個が主人公でありつつ、繋がっていったときにどういう魅力が出てくるかということです。我々は、例えば、都市計画の発想から上から見たときに「ここは～のゾーン」「ここは～のゾーン」とゾーニングしながら、都市を見ていますが、部分の集合体として集まった一つの群が「何かこの辺はおもしろい」というような、部分から出発していくような全体の計画も時に大事なのかなと思います。ベクトルは逆ですが。

せつかくこのように考えていくんだったら、1つの花びらではなく、それでグループができていく、上から見るゾーニングではなく、集まったこのネットワークだけでも何かおもしろい1歩ができると、「北上の西側ってこんなにおもしろい」というような発想が出てくると思います。その発想と同時に、先ほど言った茎の部分の発想をちゃ

んとどこかで骨太にやっついていかないと、どんどん周りが重くなって倒れてしまう、その世界がこのまちには必要なのではないかと思いました。

今日は黒岩小学校に行かせていただきました。去年は、フォーラムで口内の元気な方と会いました。ああいう人たちと会っていると、元気な地域のかたちは元気な地域の人たちがどこまで活躍できるか、場所を持てるかという気がします。その場所を確保していくことが、今、北上のやろうとしていることで、けっこういいやり方だなあと思います。単なる地域単位で地域別懇談会をやっていくのではなく、あくまで全体の中での地域という考え方、でも、その地域の中に全体が存在しているということを忘れてはいけないと思います。

そういうことをどうやって表現していけばいいかということですが、今、私はいい方向には向かっているけれど、そこの部分が欠けていくと、「この地域はこうです」「この地域はこうです」という風にして、「あそこの地域はうまくいった」となっていくのは、あまり良くないだろうと思います。もう一つは、では黒岩地区、口内地区というときに、先ほど、部分に全体が入ると言いましたが、黒岩といっても口内といっても、あるどこかを一つにひっくるめていいのかということです。それも、ある種の集落とかいくつかの単位でできているということです。全部が1つに全部集まっているわけではありません。

ゾーニングしたときに、北上がいくつかのものによって成り立っていると同時に、その一つの地域もいくつかの集落やもともとの伝統から成っています。もともとは2つの村がくっついた集落もあるわけですから、ライフスタイルを含めた単位の違いをちゃんと頭の中に入れておかないといけません。しかし、今、どんどん人が少なくなって、小学校も統合されて一つになってしまっていますが、実はそのミクロの単位に気をつける視点、そこまで本当は見えていくべきなのではないかと思います。きりがありませんが、一つの単位、生活単位のようなものが、こちらで言う黒岩地区、口内地区という大きな単位と完璧に1対1ではなく、小さい単位になっているようなものをうまく結び付けていく発想が必要なのではないかという気がします。

今のやり方としては、あじさいという言葉にこ

だわらなくてもいいから、一つの部分をどうやって発展させていくかという方向性は「元気な北上のかたち」をやっていく分には、私は問題ないと思います。しかし、どこかで一つを大切にすることを繋げてみることをちゃんと冷静に考える所がないといけないなと思います。それは都市マスなのかわかりませんが。市民向けに表現していくときの言葉でその辺りを冷静に表現していく脚色が必要かなと思います。あじさいの話にしても、私たちは、あじさいはその意味でいいなと思っても、この前のフォーラムのときも理解できないという声もあったし、

言い方を変えればきっとわかるんだけど、というようなこと、それが今日の感想です。

今日、行った黒岩小学校の子どもたちはみんな元気で、また行きたくなるような学校でした。12～13人でやる授業は教える立場からいうと一番おもしろいです。みんなの息使いも聞こえてくるような距離感で、私のことも1/12でわかってくれているので、深いです。今、景観学習などで僻地の学校に行ったりしますが、黒岩あたりになると、教育の原点だと思います。

しかし、今の行財政改革のなかで、教育の観点から決めているのではなく、コスト面から学校教育の方向を決め、学校を減らしていく、そうせざるを得なくなっています。そこで、本当は教えられるはずだったあじさいの花の小さな部分での濃さのようなものをどうやって子供たちに学ばせるかというようなことを本当は教育関係者は考えなければならないと思います。統合して大きくして、クラスが40人のなかで、そういうものの原点として、北上は小さな単位をしっかりと発揮していこうということを、もし前面に押し出すのだったら、逆行するかもしれませんが、小学校の統廃合をしないという方向もあります。青森はそうです。

青森は十和田湖の近辺に「秋田県小坂町立十和田小学校」と「十和田市立十和田小学校」があります。同じまちだったら間違いなく統廃合の対象になります。片方の小坂町立十和田小学校は、小中学校をくっ付けて作っています。私はそこで今日のような景観教室をやったのですが、小中学校全員で6人です。十和田市立十和田小学校も1クラス10人位です。同じまち、同じ県でないので、

残っているのですが、おもしろいと思うのが、運動会や学芸会をこの2つの小学校が対立しながら一緒にやります。お互いのOBや先生が一生懸命になって「負けるな」と応援します。小さな学校は小さな学校でそういう連携の仕方があります。

少ないと競争心がないとかいわれていますが、それはさっきの1つの単位を見ていったとき、どちらが幸せかというときに、それはそれで先生が心配しているのは、生徒が高校に入って40人クラスになったときに対応できるのか、適応性があるのかということです。今まで、先生1に対して生徒1で、また、教科教室型の授業をやっているので、自分に家庭教師が8人いるみたいな理想的な環境です。学力も高く、小中学校の生徒でパワーポイントを作って20分で発表するくらいです。それは密度が濃い勉強をしているからで、少なくともいいという話をどこで区切るかという、政策的に言うと統廃合とかそれぞれ出てくるのもどかしいのですが、本当の理想論で言うと、小さな単位で頑張っているところは、密度が高い成果が出るということがあります。

小さなものをしっかりやっっていこうというときに、どこまでそれを熱く考えていくか、どこかでターニングポイントがくると思います。あじさい型でいるために、乗り合いタクシーやデマンドタクシー他どんどんやっていくときに、それは過剰投資だと言われる時期がきっと来ます。今のままの傾向だと。その時に、「北上はここを1人になっても5人になっても、その発想は変えられない」とはっきり言い切れるだけの覚悟がいるのではないかと思います。

それから、中心市街地活性化計画とは、あじさい一つ一つの花の部分が中心市街地とどう関わっていくかという中心市街地活性化計画をつくっていかなければならないということです。中心市街地をどうやって元気にするかではありません。

この北上プランで考えて、口内は中心市街地とどう関係するのかということを考えるからこそ、元気になるのであって、よくある中心市街地を元気にしようという話になると、周りは全く無関係になります。いろいろなまちで郊外の農村からくる議員さんと商工会を応援する議員さんの闘いがあります。そうではなく、あじさい型プランだ

からこそ、中心市街地と外の花をどう関わりを持たせるか、中心市街地活性化だよという言い方を意図的に何回もすることだと思います。違う花というのではなく、関わりのお話が必要かなという感じがします。

6. 今後のスケジュール

いわて NPO - NET サポート 菊池 広人

昨年はどういったまちのかたちになればいいのかという議論だったのですが、今年はいじさい型集約都市に向けて動いているなかで、現状を踏まえてのアドバイスをいただきたいと思っています。いじさい型集約都市実現のための、新しいアイデアやコンテンツをいただきたいと思っています。報告書に関しては、そういったものをメニューのようなかたちでまとめていくところが今年やるところかなと思っています。そのなかで、だんだん、来年度に関して、公共交通ビジョンや都市マス等に動きがありますので、3年目はそれを集約するというので、1年目にかたちづくり、2年目にコンテンツができ、3年目に方向性というところに移っていくかたちにしたいと考えています。